

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00123

研究課題名（和文）ドイツ語オペラ確立への軌跡：ドイツ語諸都市の上演状況比較から辿る自国語オペラ

研究課題名（英文）Trajectories towards the establishment of German-language opera: Tracing the history of the establishment of home-language opera through a comparison of performance conditions in "German cities"

研究代表者

大河内 文恵 (Okouchi, Fumie)

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：20463953

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：18世紀半ばまでほぼイタリア・オペラ寡占状態とされてきたドイツ諸都市において、ドイツ語オペラがどのように確立・受容されていったかを上演史から読み解き、論文『ハッセとヴェーバーの間：1765年から1830年までのドレスデンにおけるオペラ上演に関する予備的考察』『七年戦争後のベルリンで上演されたオペラドレスデンとの比較から』『1760年代から1830年までのウィーンにおけるオペラ上演についての試論：ドレスデン・ベルリンとの比較から』にまとめた。同じ時期でも、イタリア・オペラの重要度はドレスデン、ベルリン、ウィーンの順に低くなり、ドイツ語オペラの重要度はその逆であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

主要な作曲家や作品が中心となって進められてきた音楽史記述に、上演史というファクターを加えることでこれまで見ていなかった視点を提示した。オペラの作品研究において、作曲家が直接関わらない上演は対象から除外されてきたが、それこそが当時のオペラ上演の実態を表す一断面だといえる。最終年度には対面とオンラインを合わせて100人を超える参加者を得てシンポジウムを開催し、研究成果を社会に還元することができた。

研究成果の概要（英文）：The history of the performance of German-language opera in German cities, which until the mid-18th century had been almost exclusively dominated by Italian opera, provides an insight into how German-language opera was established and accepted. Compiled in Between Hasse and Weber: A Preliminary Study of Opera Performances in Dresden from 1765 to 1830, Opera in Berlin after the Seven Years' War: A Comparison with Dresden, and An Essay on Opera Performances in Veen from the 1760s to 1830: Dresden and A Comparison with Dresden and Berlin'. The results show that, even during the same period, Italian opera became less important in Dresden, Berlin and Vienne, in that order, and vice versa for German-language opera.

研究分野：西洋音楽史、オペラ史

キーワード：オペラ史 イタリア・オペラ ドイツ語オペラ ドレスデン ベルリン ウィーン ミュンヘン 上演史

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

17世紀末から18世紀半ばのザクセン宮廷では、外交行事・宮廷行事・オペラシーズンの3つの上演機会があり、上演に携わるメンバーや上演する劇場が上演機会の違いと結びついてきたが、ヴェーバーさらにはヴァーグナーの時代へ向けての連続性は見られず、この間の時代はドレスデンにおけるオペラの衰退期とされ、あまり顧みられてこなかった。イタリア・オペラ一辺倒からドイツ語オペラ隆盛への過渡期であり、バロック・オペラからロマン派オペラへの過渡期にもあたるこの時期のオペラの解明は、作品史に依存するのではなく、上演の演目とそのレパートリー化の過程を上演機会や上演場所と併せて分析することで初めて可能になり、オペラ史記述そのものを根底から見直すためにも必要不可欠である。さらに、ヴェーバーやヴァーグナーといったドイツ語オペラ隆盛の下地として機能したという文脈から考えることで、その意義は飛躍的に増大する。他の都市のドイツ語オペラの状況との比較からは、ザクセン地方の独自性が浮かびあがってくるものと思われる。

### 2. 研究の目的

18世紀後半から19世紀のオペラの研究は、作曲家ならびに作品研究はおこなわれているものの、同時代のオペラ上演や受容に関しては一部の有名作曲家を除外すると、ほとんど研究が進んでいないのが現状である。従来の研究では、1つのオペラがいつ作られ、いつどこで初演・再演されたかまでは扱うが、そのオペラがその後どのように拡散されたかまでは追跡されない。18世紀後半から19世紀半ばのヨーロッパのオペラの過渡期における作品動向に関して、ドイツ語圏における全オペラ上演を包括的に扱った研究基盤を整えるだけでなく、地域横断的な視点から上演状況を分析にするという点に、本研究の独創性がある。作品は作られただけではただの「モノ」であって、上演されて初めて価値をもつ。そしてそれは、同じ形あるいは形を変えて、各地に広がっていくことで、その価値が当初のレベルを超えていく。自国語オペラの成立とその受容を含めた変遷を辿ることによって、他国語のオペラと自国語のオペラの社会への影響力を紐解く手掛かりとなることが期待される。

### 3. 研究の方法

1770～1830年のドイツ主要都市のオペラ上演のデータベース(Die Oper in Italien und Deutschland zwischen 1770 und 1830)をベースにしながらいずれも既存のカタログO.Landmann: Die Dresdner italienische Oper zwischen Hasse und Weberや宮廷日誌、各作曲家の個別研究などからデータを修正し、各都市の当時の政治や音楽を取り巻く状況と照らし合わせながら分析した。分析にあたっては、上演の際の使用言語に焦点をあて、上演場所(宮廷か民間劇場か)の違いや政治状況の変化などと重ね合わせ、都市の傾向の違いを探った。オペラ上演の記録や当時の状況を記した文献など国内では入手困難な資料に関してはドイツでの現地調査と資料収集をおこなったが、2020年からは渡航が難しくなり、国内で入手できる資料に切り替えた。研究の途上で、学会や研究会での発表し、同時代の研究をする研究者から助言を得た。

### 4. 研究成果

研究成果は以下の2点に大きく分けられる。

- 1) 各都市の上演レパートリーの傾向分析
- 2) 研究手法に関する問題

#### 1) 各都市の上演レパートリーの傾向分析

ドレスデンでは七年戦争後のオペラ再開が1765年と遅れたものの、ナウマンや彼の弟子たちにより、宮廷のイタリア・オペラを残しつつ、そこにドイツ・オペラを入れ込む形で統合がおこなわれた一方、ベルリンでは1780年代から部分的にドイツ語オペラが上演され、イタリア・オペラ中心の宮廷オペラが国民劇場(ドイツ・オペラ)に吸収合併される形で成し遂げられた。

民族意識の高まりによる結果として語られることの多かった、ドイツ諸都市におけるイタリア・オペラからドイツ・オペラへの移行は、それだけで説明できるほど単純ではない。ドレスデンとベルリンとの間で見られる相違は、性質の異なる劇場をどのように使い分けるか、あるいは宮廷が抱える人材をどのように振り分け、外部の人材を活用するかといった経営判断的な力が働いていると考えられる。

この時期に関していえば、ヴィーン・ドレスデン・ベルリンの三都市においては、イタリア・オペラの重要度はドレスデン、ベルリン、ヴィーンの順に低くなり、ドイツ語オペラの重要度はその逆順となっている。それはヨーゼフ1世のドイツ化政策や、マリア・テレジアの夫がフランス人であったことが影響していると考えられる。同じオペラがこれらの都市を跨って上演されるという興味深いケースもしばしばみられ、その分析については今後の課題としたい。

## 2) レポートリー研究における研究手法に関する問題

個々の作品の初演年月日の特定に際し、参照する資料によって日付が異なる例が散見された。また、ドレスデンにおいてはドイツ語オペラの上演は移動オペラ団によるものが多く、宮廷資料を主要な典拠とする研究では欠落している可能性がある。上演日に関する情報は、台本における記載や宮廷日誌、選帝侯や王の誕生日といった用途からの類推などさまざまなファクターがあり、一元的なデータがあるわけではない。すぐに研究成果に結びつくわけではない、こうした地味で目立たない調査の重要性を認識する必要がある。

また、移動オペラ団の研究は進んできているもののまだ途上で、今後それらのデータが補完されることが見込まれる。今回の調査では、再演回数はカウントに入れていないが、人気のレポートリーほど再演回数が多いことを考えると、それも含めたデータが必要になると考えられる。さまざまな資料がデジタル化され公開されるようになってきた近年、レポートリー調査が徐々に広がってきつつある。こうした問題点を共有することも成果の1つと考え、ここに記す次第である。

これらの研究成果は、学会や研究会での口頭発表や論文の形で公表した。最終年度には「グルック・シンポジウム：オペラ《オルフェオとエウリディーチェ》とその周辺」と題するシンポジウムを対面とオンラインのハイブリッドでおこなった。この中で「グルック《オルフェオとエウリディーチェ》のドイツ上演をめぐる」と題し、1773年のミュンヘン上演を取り上げた。シンポジウムでは、作品概要、オルフェオをめぐるテキストの変遷、バレエ改革やオペラ改革、ロンドンでの上演、ロシアの改革オペラ、映像作品などさまざまな視点から《オルフェオとエウリディーチェ》を扱った。特にロンドン上演とミュンヘン上演とは台本上も音楽上も共通点が多く、レポートリー移動の興味深いケースであり、オペラ作品は作曲家が完成させた時点が最終的な形であるとは限らず、時間と空間を超えて変容するその形も含めてとらえることによって、単に受容として捉えるだけでは見えてこない作品のありかたが浮き彫りになった。7名の登壇者とコメンテーター1名による討論や、研究成果に基づいてプロの演奏家による実演もおこなったことにより、より幅広く社会に還元でき、今後のオペラ研究の発展に寄与しうる有意義なシンポジウムになったと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大河内文恵	4. 巻 17
2. 論文標題 1760年代から1830年までのヴィーンにおけるオペラ上演についての試論：ドレスデン・ベルリンとの比較から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京芸術大学音楽学部附属高等学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 51-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大河内文恵	4. 巻 14
2. 論文標題 ハッセとヴェーバーの間：1765年から1830年までのドレスデンにおけるオペラ上演に関する予備的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校『研究紀要』	6. 最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大河内文恵
2. 発表標題 18世紀ドイツにおけるギリシア悲劇を題材とするオペラ：グラウンの《イフィゲニア》を中心に
3. 学会等名 シンポジウム「ギリシア悲劇主題の18世紀のオペラーイピゲネイア主題のオペラを起点として」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大河内文恵
2. 発表標題 J.A.ハッセとカストラート
3. 学会等名 カストラート研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大河内文恵
2. 発表標題 1765年から1830年までのドレスデンで上演されたオペラ： 上演言語と翻訳オペラの視点から
3. 学会等名 日本音楽学会第70回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大河内文恵
2. 発表標題 ロンドンにおけるハッセのオペラ上演：《アルタセルセ》を中心に
3. 学会等名 日本ヘンデル協会研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大河内文恵
2. 発表標題 1763～1830年のベルリンで上演されたオペラ：ドレスデンとの比較から
3. 学会等名 早稲田大学オペラ / 音楽劇研究所 研究例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大河内文恵
2. 発表標題 18世紀ドイツにおけるオペラとバレエの上演実態調査の問題点：ドレスデンとベルリンを例に
3. 学会等名 バレエ史研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大河内文恵
2. 発表標題 17～18世紀ドイツにおけるバレ：ドレスデンを中心に
3. 学会等名 発生期バレエ研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大河内文恵
2. 発表標題 グルック《オルフェーオとエウリディーチェ》のドイツ上演をめぐって
3. 学会等名 グルック・シンポジウム：オペラ《オルフェーオとエウリディーチェ》とその周辺
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤英・大西由紀・岡本佳子（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 379
3. 書名 オペラ / 音楽劇研究の現在：創造と伝播のダイナミズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

*図書『オペラ / 音楽劇研究の現在：創造と伝播のダイナミズム』の担当ページ：37-62
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------